母子乱交の場に変わり果てた街中の銭湯

父がＴＶの音で賑やかなリビングで息子二人に優しく微笑んで言った。

「新しいママとはなじんだか？」

ソファに座って足を広げる父。

青いカーペットには夏らしい裸足が二つくっついている。

義母がこの家にやってきて三週間が経過していた。

閑静な街中の軒並み高級住宅街の一角。

庭には小さな楠（くすのき）が二つ。

「優しいママだよ！」

嬉しそうに息子の一人、ヨウタが答えた。

横で完全同意といった感じでタカヒロが頷く。

おっぱいのとても大きい笑うと小さなえくぼと口元に小さな皺が出来る美人のママだ。

太ももはムッチムチで、熟女にしては珍しくあそこの毛を全て剃り落している。

暑い夏の真っ最中。母がミニスカートでリビングをウロウロすると、太

めのムッチムチの太ももが

息子二人の目の前を行ったり来たり。

一歩二歩と足を前に進める度に、肉足が生々しく艶めかしく目の前をうごめく。妖艶だ。

「まあ仲良く４人でやっていこうな」

父はもう一度微笑んだ。

祖母がなくなってはや４年。３人での生活を半年ほど経て再び賑やかさがこの家に戻ってきた。

母は色気むんむんで、だけどとっても健康的でもある。

二人の息子に料理をふるまい育てている。

父は仕事一筋である。

会社にいることが多く、学校帰りは母と息子たち三人で一緒にいることが多い最近だ。

一緒にゲームをして遊んだり、車で出かけることも多い。

和やかな時間が流れていた。

一度、母のシャワールームに母がいることを知らずに息子の一人タカヒロが入ったことがあった。

あまりの巨乳に腰が砕けそうになったヨウタ。

山のような肌色の丘に限りなく薄いピンク色の突起が二つ。

あそこの毛が全く生えていなかったため、体の側面の大半をタカヒロの方に向け、少しだけこちらに向いていたため見えた。

少しシャワーの水以外のもので濡れていたように見えた。

タカヒロの成長過渡期の巨根が反応したことは言うまでもない。

この度、車で近くのスーパー銭湯へ三人で行くことになった。

近隣の住民たちから古くより愛されている老舗の銭湯だ。

数年前に改装があり、客足は年々増えている。

「ママのいる女風呂には入ってきちゃダメだからね。ペニスビンビンに勃起しちゃうわよ」

実はこの銭湯、２人が通う学校でもチラホラ噂話が出ていた。

おもしろい、というウワサだったが二人はポカンと口を開けて聞いていただけ。

２人には面白い、というのが何のことかこの時分からなかったのだ。

創業８０年の３代目。改築されて以降だいぶ客層が変わったと噂されていた。

街の真ん中。商店街のすぐそばにある。

車で走らせて時間はかからなかった。

車を駐車場にとめて中へ・・・・・。

母が衣服を脱ぎ中でゆったり過ごしていると、なんと息子二人が中へ入ってきたではないか・・・・・。

母は気付き、二人に駆け寄る。

「入ってきちゃダメだって言ったじゃない！！？みんな裸の女の人ばっかりでしょ！！？」

パイパンの股間を堂々と二人の方に向けながら少し恥ずかしそうにフェイスタオルで慌てて隠し、母が言う。

母だけでなく、周囲の人らが皆驚いて近づいてきた。

胸を上に持ち上げ、脇を上げて・・・・・。

「どうしてここに入ってきたの！！？」

しっかりともちろん乳房と股間は白いタオルでガードしている。

ガッチガチに。絶対に見えないように。

「女の人たちの裸が見たくて！！」

二人は躊躇なく答えた。

ぶらんと目の前に２つのペニスが並んでいる。元気そうな二人。

ブランと垂れ下がり、小さくてでもそこそこの大きさには成長している。

まだ毛は生えていない。母も息子二人もパイパンパイチンというわけだ。

―――――― 体験版は以上になります。――――――――――――――――――――